

006 うさお

関西は地口落ちか、とんとん落ち、関東は考え落ちが主流だ。落語の笑いの話だ。私的には、「一目上がり」と言う噺が比較的好きだ。大筋はこんなものだったと思うんだけど？

八つあんが、隠居の家に行くと何やら巻物を取り出している。

「ご隠居、なんですかい、そりゃあ」

「うむ、久し振りに、一寸と床に掛けて見よと思つてな」

「おっ、汚ねえ巻物だなあ、ふん、ご隠居、ようがしよう、なにか変めやしよう。ですか

らね、こうキューーってえやつで、羊羹を出いのつてことにしやしよう……。絵の脇の、のたくってるなあこりゃ何ですう」

「どうもこのご挨拶だな、こりゃあ讚といって絵に添えるもんだ。いい讚ですんねえなことを言えば、八つあん、物知りだつてんでどこいっても羊羹のひとつくらいは出るな!」

「ふ〜ん」てんで、隠居のところで馳走ごちになって味を占め、今度は、大店の旦那のところに顔出した。

「旦那とこの掛け軸に字が書いてありやすね。いい讚ですんねえ。さあ、何か呑ませろ。」

「唐突になんだなあ、讚?これか?こりゃあお前、詩ってえもんだ。」

「へえ、しつ?」てんで今度はご近所のお医者さんのところに来た。

「先生!いい詩でござんすねえ。」

「おっ、はつあん。こりゃあ論語が書いてある。語というものじゃな。」

てんで次第に腹をふくらませながら宗匠のところに顔を出した。

ここで、はつあん考えた。さんと来てしと来て、ごと来たから、次はろくだつてんで、鼻息も荒く宗匠のところに来た。

「なんだか満員の船の絵だな、宗匠、こりゃあろくでしよう」

「さにあらず、これは七福神といつてな、おめでたい絵だ。」

「ありや、しちか、こつちの掛け軸は字だな。今度こそはちに違いない。いやあ、絶品なはちですんねえ。どうもこの……どうです!」

「これか?こりゃあ芭蕉の句だ。」

なんとも他愛の無いとんとん落ちの話であるが、この噺は作り手に知性を感じる。知ったか振りを揶揄したものだ。これ以外にも、「雑俳」「うん廻し」「山号寺号」なんかがいいな。最近は何、関東でもすぐに笑いをとれる地口落ちが多い。それも灰汁あじどい関西風だ。考えるということを忘れていいのか。いや、それとも拒否しているのかもしれない。考える笑いを残していかなきやね。

先週、倅に本を図書館に返して貰ったら、本のリストを採るのを忘れていた。必至で思い出そうとしたが、6冊のうち4冊しか思い出せない。毎回、何冊かはタイトルや惹句を見て借りてくるので、著者名もほとんど覚えていない。この先こんな風に色んなことが思い出せないんじゃあ不安だなあ。



作品名	作家名	感想	評価
麦屋町昼下がり	藤沢周平	「麦屋町昼下がり」「三ノ丸広場下城どき」「山姥橋夜五ツ」「榎屋敷宵の春月」の短編集。いずれも剣の達人。ふとしたことから藩の秘事に関わっていく。このモチーフが多いと思う。	☆☆☆☆ 読みやすいのが利点。以前は臭みを感じたが最近はどうでもないな。
秘太刀馬の骨	藤沢周平	北方の藩の前家老暗殺に“馬の骨”という秘太刀が使われた。その遣い手とその秘儀を見極める剣豪推理小説?派閥争いは誰が味方か判らない。連作短篇。健ちゃんが呟いた妹の結婚相手を“何処の馬の骨だか”と言ったのを思い出した。	☆☆☆ やはりサラリーマン小説だと思う。身に詰まされるなあ、ここだな、読まされるのは。

闇迷路	宝生茜	いじめを受けていた少年は呪うことで完全犯罪を狙う。と言うイントロから始まり、5人の主人公が登場する。それぞれの物語がやがて一つになって破局を迎えていく。	☆☆☆ 男か、女かが判らない作者、でもこれは男だ。話が長いぞう。倒れそうだった。
シメール	服部まゆみ	京都を騒がす連続通り魔殺人事件。被害者は六人を数え、機動隊まで出動。主人公はその犯人「零崎人識」と偶然知り合い、互いに鏡を映して見ているような、自分との相似を実感する。ひとつの世界が壊れていく。	☆☆ 惹句は良い。でも読み難かった。この人は画家でそちらの才能がすごい。仏国の賞も貰っている。
藤沢周平全集 8巻/一茶、白き瓶	藤沢周平	俳諧師・小林一茶。当時の俳壇とは一線を画する作風故疎外される。発句数、生涯二万首。常に貧乏に苛まされ継母との確執を続け、金銭への執着と潔くない人生が綴られる。他の1編は長塚節。	☆☆☆☆ 藤沢周平は世間に虐げられた人と聞く。判る！判るぞう。
藤沢周平全集 18巻/よろずや平四郎活人剣	藤沢周平	神名平四郎、知行千石の旗本の子弟だが、冷や飯食いの妾腹の子。思い屈し、実家を出奔、裏店に棲みつき、喧嘩五十文口論二十文、とりもどし物百文、よろずもめごと仲裁つかまつり候。悲哀にみちた人生絵図。	☆☆☆ 虐げられているなあ、小公子時代劇を読んでいるようだ。泣かせるなあ、あつ、涙が出てきちゃった。
雪月夜	馳星周	根室でロシア人向け電化製品などの販売店を営む幸司の前に、憎むべき幼なじみの裕司現れた。何もかもを忘れていた数十年間が一瞬のうちに蘇る。欺く、犯す、殺す、殴る。	☆ この人お得意のバイオレンスもの。まあまあか。
サイレント・ボーダー	永瀬隼介	渋谷の街に突如現れた少年達による自警団「シテイー・ガード」。カリスマを放つリーダーの少年三枝を駆り立てるものは？荒廃した現代が産んだ狂気の行方は。	☆☆ まっ、時間つぶしには最適かな、残らないし。
水の通う回路	松岡圭祐	事件は発売されたばかりのゲームをやっていた子供たちが同時多発的に自殺未遂を起こす。ゲーム会社の内情が暴露され色々な事実が浮かび上がってくる。犯人の動機は意外なものであった。	☆☆ 肝はサブリミナル効果かと思ったが違った。
千里眼/ミドリの猿	松岡圭祐	『千里眼』の続編。嵯峨敏也は悪夢にうなされていた。多重人格と判断した入絵由香の恐るべき夜叉の顔をまのあたりに。ミドリの猿、その言葉の真意は？前を読んで居ないから、よく判らないや。	☆☆☆ 催眠からの続きで、連作ものだったとは知らなかった。よく判らなかつた。
催眠	松岡圭祐	売れない催眠術師、実相寺則之は原宿で占いの店をしている。実相寺のもとに美しい女性が現われた。名は入絵由香。自分は「緑色の猿」に催眠術をかけられているので、それを解いてほしいという。嵯峨敏也は、入絵由香が多重人格であることをつきとめる。	☆☆ これはビデオの方が面白いだろうなあ。筋を追うのがやっつです。
シーズザダイ	鈴木光司	船越はフィジーでヨットを沈没させ、好きだった女性を亡くした。ヒステリックな妻と離婚し、ヨットを手にした船越は、船が深没した真相を追って、自閉症の自分の娘とともに航海の旅に出る。	☆☆☆ ヨットのところの話は面白いが、それ以外は取って付けた様な話だ。
奇跡の人	真保裕一	相馬克巳は、事故で植物人間になったが奇跡的に回復した。記憶が小学5年で途切れており、入院生活を送っている。退院して1人で生活することになった克巳は、過去の自分を出す。	☆☆☆ もう少し面白くても良いはずだが？

006 うさお

関西は地口落ちか、とんとん落ち、関東は考え落ちが主流だ。落語の笑いの話だ。私的には、「一目上がり」と言う噺が比較的好きだ。大筋はこんなものだったと思うんだけど？

八つあんが、隠居の家に行くと何やら巻物を取り出している。

「ご隠居、なんですかい、そりゃあ」

「うむ、久し振りに、一寸と床に掛けて見よと思つてな」

「おっ、汚ねえ巻物だなあ、ふん、ご隠居、ようがしよう、なにか変めやしよう。ですか

らね、こうキューーってえやつで、羊羹を出いのつてことにしやしよう……。絵の脇の、のたくてるなあこりゃ何ですう」

「どうもこのご挨拶だな、こりゃあ讚といって絵に添えるもんだ。いい讚ですんねえなことを言えば、八つあん、物知りだつてんでこいっても羊羹のひとつくらいは出るな!」

「ふ〜ん」てんで、隠居のところで馳走ごちになって味を占め、今度は、大店の旦那のところに顔出した。

「旦那とこの掛け軸に字が書いてありやすね。いい讚ですんねえ。さあ、何か呑ませろ。」

「唐突になんだなあ、讚?これか?こりゃあお前、詩ってえもんだ。」

「へえ、しつ?」つてんで今度はご近所のお医者さんのところに来た。

「先生!いい詩でござんすねえ。」

「おっ、はつあん。こりゃあ論語が書いてある。語というものじゃな。」

つてんで次第に腹をふくらませながら宗匠のところに顔を出した。

ここで、はつあん考えた。さんと来てしと来て、ごと来たから、次はろくだつてんで、鼻息も荒く宗匠のところに来た。

「なんだか満員の船の絵だな、宗匠、こりゃあろくでしよう」

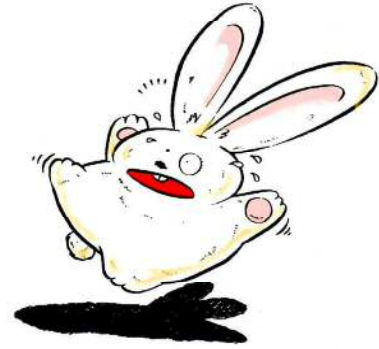
「さにあらず、これは七福神といつてな、おめでたい絵だ。」

「ありや、しちか、こつちの掛け軸は字だな。今度こそはちに違いない。いやあ、絶品なはちですんねえ。どうもこの……どうです!」

「これか?こりゃあ芭蕉の句だ。」

なんとも他愛の無いとんとん落ちの話であるが、この噺は作り手に知性を感じる。知ったか振りを揶揄したものだ。これ以外にも、「雑俳」「うん廻し」「山号寺号」なんかがいいな。最近は何、関東でもすぐに笑いをとれる地口落ちが多い。それも灰汁あじどい関西風だ。考えるということを忘れているのかな。いや、それとも拒否しているのかもしれない。考える笑いを残していかなきやね。

先週、倅に本を図書館に返して貰ったら、本のリストを採るのを忘れていた。必至で思い出そうとしたが、6冊のうち4冊しか思い出せない。毎回、何冊かはタイトルや惹句を見て借りてくるので、著者名もほとんど覚えていない。この先こんな風に色んなことが思い出せないんじゃあ不安だなあ。



作品名	作家名	感想	評価
麦屋町昼下がり	藤沢周平	「麦屋町昼下がり」「三ノ丸広場下城どき」「山姥橋夜五ツ」「榎屋敷宵の春月」の短編集。いずれも剣の達人。ふとしたことから藩の秘事に関わっていく。このモチーフが多いと思う。	☆☆☆☆ 読みやすいのが利点。以前は臭みを感じたが最近はどうでもないな。
秘太刀馬の骨	藤沢周平	北方の藩の前家老暗殺に“馬の骨”という秘太刀が使われた。その遣い手とその秘儀を見極める剣豪推理小説?派閥争いは誰が味方か判らない。連作短篇。健ちゃんが呟いた妹の結婚相手を“何処の馬の骨だか”と言ったのを思い出した。	☆☆☆ やはりサラリーマン小説だと思う。身に詰まされるなあ、ここだな、読まされるのは。